
メモリアリストの護神

藤崎 茅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモリアリストの護神

【Nコード】

N5540X

【作者名】

藤崎 茅

【あらすじ】

誰もが抱きゆるもの、思い出。それが傷つけられたとき、人は思い出の鎖に縛られ、異能を発現する。

高校に入学した新堂護の地元では、女性が中心に襲われる「連続噛みつき魔事件」が多発していた。そんななか、護は吸血鬼と化した謎の女性に襲われていたところを、同じ高校のクラスメイト夜桜舞姫に助けられる。彼女は、思い出の鎖を断ち斬る刀を振るい戦う少女だった。

護は、現在多発している「連続噛みつき魔事件」が、思い出の鎖に

縛られた理想^{クラシケ}狂の起こしている事件だという真実を聞かされ、人の
思い出をめぐる戦いに巻き込まれることになる。

プロローグ（前書き）

ひとまず、プロローグを投稿させていただきます。

プロローグ

終電直後の駅前広場は、完全なる静けさに満ちていた。

駅ビルを始め、周囲にある店はすべて、一日の業務を終えて眠りについている。

明日、入社してくる新入社員へのセミナー。その準備に追われ、退勤時間を大幅に遅らせてしまった私は、見慣れない深夜帯の地元を歩いて帰宅していた。

タクシーに乗って帰る手もあったが、私の借りているアパートは駅から歩いて10分程度という立地にある。並んでいる間に着いてしまうかもしれないし、高い深夜料金を払ってまでタクシーに乗って帰る必要はないと考え、結局徒歩で帰ることにしたのだ。

しかし、歩きはじめて数分後。すぐにその判断を後悔した。

駅から少しでも離れると、駅前広場ほどの明かりは無く、数メートルおきに設えられている頼りない外灯くらいなものだった。必ず通なねばならない公園のわき道では、ホームレスの段ボールハウスが目に見え込んでしまい、無意識に歩行速度が上がる。無音の夜道に響く、自分の規則的な足音さえ不気味だ。

薄暗い公園のわき道を抜け、ようやく私の住むアパートがある住宅街に出た。「もう少しで家に帰れる」という安心感が芽生え始める。

加速気味だった歩行速度が徐々に緩やかに落ちてきたときだった。目的のアパートは、すでに目と鼻の先にあることはわかっている。だが、私の目に真っ先に飛び込んできたのは、そんな見慣れた日常ではなかった。

私の歩いている道の先。

そこに立っている、不気味な男。

ここは住宅街。人がいることに何の不思議もない。だが、今は深夜1時過ぎ。いくら住宅街とはいえ、こんな真夜中に外で。しかも1人で何をやっているのだろうか？

おかしいことはそれだけではない。暗がりではッキリとはわからないものの、遠目にある外灯を頼りに目を凝らしてみても気が付いた。男はマントを纏っているようだった。

真っ黒なマント。その胸元からわずかに覗く白地のシャツ。

俯き加減で立ち尽くす人影に、どこかで見た空想上の怪物を連想させる。

私はしばらく、その場で立ち止まって様子を伺う。しかし、男は全く動こうとせず、ただただその場に立ったまま、体をこちら側に向けている。

仕事の疲れはすでにピークに達していたが、あんな不審な人物の側を通って行く勇氣はない。

私は仕方なく、道を迂回して反対側の通用口から帰ることにし、来た道を引き返そうと踵を返す。

住宅街に響く、私の足音。

住宅街に響く、背後からの足音。

「……え？」

気のせいではない。間違いなく、自分以外の者の足音が聞こえた。私は、思わずその場で足を止め、意識だけを背後に向ける。

——考えすぎだ。 そうだと願いつつ、意識は背後に向けたまま、私はもう一歩前へと歩を進めた。

しかし、私の願いは、再び背後から聞こえてきた足音によって、あっさりと碎かれる。

「……ッ！！」

息が詰まるような悲鳴とともに、その場に凍りつく。間違いない。

あの黒マントは、私に歩を合わせている。

もはや闇夜の恐怖など気にもならない。今はただ、こんな真夜中にたった一人で立ち尽くし、自分のあとを着けてくる不気味な存在に恐怖を感じていた。

硬直するわたしに、さらなる追い討ちがかかる。

背後から容赦なく近づいてくる、短調な足音。立ち止まっている私に構うことなく、距離を詰めてきているのに気がついた。

その事態を全く予想していなかったわけではない。だが、まさか自分の身に襲いかかるとは……。

言いようのない嫌悪感と恐怖心に全身を抱き締められる。

足音が徐々に近づいてくる。

今すぐ逃げ出さなければならない。

それなのに、私の足はタガタと震えるだけで、言うことを聞いてくれそうにない。鼓動は高鳴り、呼吸は荒くなる一方だ。

と、ふいに私の首に何かが触れた。

ひんやりとした冷たさ。しかし、どこか人間味の通った不気味な感触。確認せずとも、それが男の手だというのは即座に理解できた。

「ひ……ッ!!」

私は小さな悲鳴をあげ、反射的にその手を振り払う。それを合図にしたかのように、私の足は住宅街を駆け出していた。どこに向かって走っているかなど、もはや私にはわからない。だが、あの不気味な男から逃れる一心で滅茶苦茶に走り回った。

乱れた私の呼吸と、必死の思いで駆ける足音だけが響く。

「——そんなに急いで、どこに行くんですか？」

突然、耳元から聞こえてくる、乾いた囁き声。

それに続いて、私の首筋に激痛が走った。何か鋭利なものに貫かれたような、耐えがたい激痛。それとともに感じる、男の生温かい吐息。

信じがたいことだが、即座に噛みつかれたのだということを理解した。

「ツ……あああッ！！」

深夜の住宅街に、私の悲痛な絶叫がこだまする。

「!?!?!?!むぐう!」

だが、その絶叫さえも、男の手によってすぐにふさがれてしまう。首筋から暖かい血が流れ出す、不愉快な感触。あまりの痛みと恐怖に、止めどなく涙があふれ出してくる。

……だが、ほどなくして私は不思議なことに気がついた。

さつきまで、間違いなく私の痛覚を蹂躪していた、貫くような耐えがたい痛み。

その痛みが、まるで洗い流されるような優しさで消え失せていくのがわかる。

そればかりか、首筋に感じる熱い刺激に、恍惚に似た快感さえ感じていた。

「気分はどうですか？」

耳元で囁かれる、男の声。流れ込むように聞こえてくるその声音が、私の快感をさらに加速させる。

「あなたはまだ、生まれたばかりの赤子同然。でも、大丈夫。あなたの血は、なかなか美しい味がする。ゆっくりでいい。僕と同等の存在になった喜びを、歩くような速度でかみしめてくださいね」

私は、真つ赤に染まった視界で月を仰ぎ、男のそんな囁きに聞き浸っていた。

プロローグ（後書き）

まだ続きがあります。

本当に少しずつですが、徐々に書き進めたいと思います。
未熟な文章ですが、一生懸命書かせていただきますので、長い目で見ていただけたら幸いです。

月明かりの姫君 ？

入学式の朝は、これといって大きな変化も無く訪れた。

いつものごとく、6時半頃には起床し、顔を洗う。テレビをつければ、もはや平日に顔を見かけない日は無い、お馴染みのアナウンサーの顔があった。

BGM程度の認識で聞き流しつつ、俺は朝食の準備を進める。

何から何まで、昨日までの短い春休みと代わり映えのない朝。違う事といえば、今日から3年間、毎日袖を通すことになる制服が変わったことぐらいだ。

……おっと。この流れでいくと、そろそろ恒例の挨拶が飛んでくるのかな？

「おーい！ 起きてるかぁー！！」

俺がそんなことを考えていたタイミングを見計らっていたかのように、朝の静けさを破る呼び声が聞こえてきた。

「真護まもるーッ、新堂真護しんどうまもるーッ！ 起きてるなら、ただちにこのドアを開けなさいよねーッ！！」

朝っぱらから、容赦ない大声で俺の名を呼ぶ声。窓の外を見ると、出勤途中の会社員風の男性が、苦笑を浮かべながら家の玄関前を見ていくのが見える。

いつものことではあるが、流石に名前まで叫ばれるのはいつまで経っても恥ずかしい。

俺は今だに叫び続けている声の主の要求に答えようと、朝食を作る手を止め、玄関に向かおうとした時だった。

「よーし……、ねぼすけには喝が必要だな？ あと3つ数え終わるうちに出てこないなら、このドア、蹴破るからねー！」

「うわっ……、ヤバッ！」

そんな凶行を堂々と予告され、つい思ったことが口について出る。俺は緩やかだった足取りを速め、急いで玄関に向かうが、暴挙への

カウントダウンは容赦なく始まってしまった。

「覚悟しなさい！ ……ひとつ、……ふたつ……」

「わぁーっ！ 待て待て、ストップ！！」

叫びながら、俺は勢いよくドアを開けた。……が、

「みっつ！！」

「……って、うおおっ！？」

遅かったようだ。玄関扉の向こうで俺を出迎えたのは、矢でも放ったかのような鋭い蹴り。俺はそれを、開け放ったドアに背を預けるようにして飛び退き、ギリギリで避けることができた。

「遅いっ！ わたしのことを1分14秒も待たせるなんて、なかなかいい度胸してるじゃない？」

ドアにへばりついたまま硬直している俺に、そんな楽しんでるようにも聞こえる言葉が飛んできた。

その声の主に目を向けると、俺と同じ高校の女子の制服を着た少女が、胸の前で腕を組み、からかうような微笑みを浮かべているのが目に映る。

平均的な高校生女子の身長。出るべきところも含め全体的に細身だが、それは痩せすぎているわけではなく、実に健康的な印象をうける。程よい明るみを帯び、肩に触れるくらいまで伸びた明るみのあるショートヘアーが、挨拶代わりの蹴りを飛ばしてくる活発さを強調していた。

俺は、また蹴りが飛んでこないか警戒しつつ、ゆっくりと態勢を立て直しながら、懇願するように口を開いた。

「渚沙、毎朝言ってるだろ。挨拶代わりに空手の技出すのは勘弁してくれて……」

「別にいいでしょ、今更。もう3年近くこのやり取り続けてるんだから。真護だって、簡単に避けてるし」

言いながら渚沙は、不敵な笑みを浮かべつつ、腕組みを解いた。

俺の幼馴染、千晶渚沙ちあきなづさの言うとおりで、これも日常。彼女からランダムに繰り出される空手技から始まる、ハイテンションな朝。

嫌いじゃないんだけど、心臓に悪いんだよなあ。

「それより、もう学校に行く支度出来てるの？」

俺がそんなことを考えているとはつゆ知らず、渚沙はマイペースで話を進める。

「まだだよ。丁度、朝メシ作ってる時に渚沙が来たんだから」

「ああ、そうだったの？ だったら待っててあげるから、さっさと食べちゃって。入学式早々遅刻して、悪い印象与えたくないでしょ」

「あのカウントダウンさえ無ければ、今ごろのんびりとした朝食をだな……」

「なんか言った？」

「いえ、なんでも……」

俺は軽い抗議を試みるものの、それは渚沙の一言で制止されてしまった。

そんな会話をひとしきり終え、リビングに戻る。

俺が作りかけの朝食に、再度手を加え始めている中、渚沙はソファに座り、テレビを見ている。

ただ、平日の朝に放送されているテレビ番組といえば、ニュースくらいなもの。見ているというより、？眺めている？といった表現の方が合ってるかもしれないと思った。

朝食を作り終え、テーブルに運ぶ。最後に自分と、ついでに渚沙の分のコーヒーを注ぎ終えた時だった。

「あ、また出たんだ」

不意に渚沙が呟く。

「どうしたんだ？」

俺は、渚沙にコーヒーを差し出しながら尋ねる。

「“連続噛み付き魔事件”。ほら、最近この辺りで起きてるやつ」
渚沙はテレビで流れているニュース映像から目を離すことなく、俺の問いに答える。

「ああ、あの物騒な事件か。最近多いよな」

「うん。しかもほら、ここの住宅街。ここから10分もかからない

ところじゃん」

渚沙の示すテレビ画面には、すぐ近所にある住宅街が映し出されている。普段はあまり通らない地域ではあるが、見知った土地で物騒なことが起きたというのは、あまりいい気分じゃない。

「夜道で急に襲いかかってくるんでしょ？　噛み付くだけで、あとは何もしない。なんか、逆に気持ち悪いよね」

事件のことを話しながら、渚沙は率直な感想を漏らす。

”連続噛み付き魔事件”は、ここ数日、この辺りを騒がせている連続暴行事件。確認されているだけでも、すでに10人近くの被害者が出ている。

犯人は首筋のあたりに噛み付き、何か金品を奪うわけでもなくその場を立ち去るという。

現場には何一つとして証拠は残されておらず、犯行の目的も皆目検討のつかない事件だが、ひとつだけ妙なことがある。

それは、襲われるのは男女無差別なのだが、決定的な違いがあるということ。

襲われた男性は、噛まれた後の記憶を鮮明に覚えているのに対し、女性はその後の記憶を全く覚えていないのだ。

それだけではない。女性の被害者に限り、噛まれた翌日から例外なく夢遊病のような症状に悩まされている。目が覚めると、見知らぬ裏通りや建物の中で眠っていた、といった具合だ。

精神科を受診した被害者もいるようだが、ほとんど改善の余地は見られないという。

「単なる変質者のやったこととしては、記憶が曖昧だったり、おかしい事件だよな」

「ホント、不気味な上に迷惑だし。真護も気をつけなよ？　夜道で襲われないように」

「いやいや、そりゃ俺のセリフだったの」

渚沙の言葉に苦笑いを浮かべながら、俺はそう返す。

「わたし？ わたしは大丈夫でしょ。そんな変態、襲ってきたら返り討ちにしてやるわよ」

ソファアの背もたれで頬杖をつき、自信満々の笑みを浮かべながらそんなことを言っただけの渚沙。

その自信は、まだ経験の浅い中学生のときに出場した空手の大会で、体格差のある大人に圧勝したことからは湧いてくるのだろう。

「……っていうか、なに？ 真護、わたしのこと心配してくれてるんだ」

突然、そんな当たり前の質問を投げかけてくる渚沙。

「そりゃあ、心配するに決まってるんだろ」

「ふーん……。そうなんだ。心配、してくれるんだ……」

そう言っただけ、渚沙は再びテレビに視線を戻した。恐らく、“弱い女の子”という見方をされたのが気に食わなかったのだろう。

渚沙は時々、俺のこういった発言に対してそっけない態度を見せることがある。以前、一度謝ってみたことがあるのだが、「この唐変木！」と怒られた。なので、渚沙がこうなったら機嫌が治るのを待つしかないというのが現状だ。

なぜ自分が怒られるのか訪ねることもできるのだろうが、そんなことをすれば今度こそ命がない気がするので、遠慮している。

ただ、どれだけ渚沙に嫌な顔をされたところで、俺はきつと心配になってしまうと思う。

なぜなら、今の渚沙は“強がっているのだ”ということを、俺は知っているからだ。

5年前あんなことさえなければ、きっと渚沙は、今でも強がったらずけずにいられたのだろうから。

「そんなことより、真護」

その渚沙に声をかけられ、俺は我に返る。

「……朝食、食べないの？」

「……あ」

そこまで言われて俺は、ようやく自分で調理した朝食の存在を思い出した。

結局、入学式の朝は、いつもの日常より少しだけ慌ただしくスタートすることになってしまったのだった。

月明かりの姫君 ？



俺と渚紗は、“入学式”と書かれた立て看板のある校門をくぐり抜けたところだった。

夕凧学園高等学校。俺たちの住む町にある高校である。

よく書店などに売られている“全国高等学校ランキング”のような類の本にも、上位ではないものの掲載されることのある、いわゆる中堅クラスの学校だ。

学園の設備はそれなりに揃っており、超有名進学校と比べても申し分ない程度の環境なら整っている。そういうところも、この学園に進学を希望する学生が多い理由の一つなのだろう。

俺たちは、家族や友人同士で談笑したり、ふざけあったりしている、新入生であろう学生たちを眺めつつ、まっすぐに体育館に向かうおうとしていた時である。

「うおーい！ マモー！！ ナギー！！」

突然、そんな慣れ親しんだあだ名で呼びかけてくる声。

声の主がわかりきっている俺と渚紗は、足を止めて振り返る。目に飛び込んできたのは4、5人の男女のグループの中から、大きく手を振り全速力で走り抜けてくる、入学式とかのイベントに必ず1人はいるハイテンションな男だった。

その男は俺たちの前まで来ると、わざとらしい動作で急ブレーキをかけて止まった。

「……っと、待たせたなあ！！」

そして、おそらく自分にとって一番のキメ顔でそんな挨拶を口にする。

「別に待ってたわけじゃないけどな」

俺は慣れた調子で、彼の挨拶を受け流した。

「んだよそれー、テンションひきいなあ！　オレはお前をそんな子に育てた覚えはないぞっ！！」

いちいち大げさなジェスチャーをとりながら叫ぶ彼。もちろん、育てられた覚えはない。

「お前は相変わらずハイテンションだな、竜成^{りゅうせい}」

「ホントよ。入学式で変な行動起こさないでよね？」

俺と渚紗は、口々にそんな言葉を投げかけた。

牧野竜成^{まきのりゅうせい}。中学の時に知り合った、俺と渚紗の友人である。

身長は180センチよりもやや手前で、俺よりも10センチ程長身。がっしりとした体に着た制服のシャツは着崩しており、常にヘラヘラとした締まりのない表情を浮かべている。

茶髪に染めたショートヘアの襟足部分だけが妙に長いため、ややチャラくも見える。

正直言って、初めて会ったときの第一印象は……ハイテンションでうるさそう、だった。

きっとあまりいい友達にはならないと思っていたのだが、本質的にはかなりいい奴だということが少しずつわかってきたのだ。軽い所はあるものの、ラグビー部のエースという硬派な部分も持ち合わせており、今や俺たち友人グループの一員である。

「大丈夫だっつーの！　ちったあオレを信じろって。入学式早々、先公に目つけられるようなヘマはやらかさねえよ」

竜成はそう言いながら、両手をひらひらと振って余裕の表情を見せてくる。

「……っつーかさあ」

「ん？」

何やら、突然竜成がニヤニヤとした目つきで、俺と渚紗を交互に見てくる。そして、やれやれといった様子で腕を組み、

「これから何が起こるかからねえ高校生活初日にカップル登校とはねえ。んー、おアツい！！」

「「んなっ！！？」」

竜成の言葉に、俺と渚紗はほぼ同時に息の詰まったような声を上げる。

「ば……馬鹿野郎！ 変なこと言うなよ竜成！」

「そ、そうよ！ なんてわたしが真護と……。け、けけけ……けつ、こん……しなきゃならないのよ!!」

顔を真っ赤にして、そう抗議する渚紗を見て、竜成はさらに続けた。

「あれれ？ オレは“カップル登校”つつただけで、“夫婦で登校”なんて言ってねえぜ？ おかしいなあ？？」

「ち、ちが……！ 別に、そういうわけじゃ……」

自分の失態に気付き、渚紗はどんどん頬を紅潮させてゆく。

そりゃそうだ。いくらなんでも、結婚って……。

「ナギちゃんはひよつとして？ マモとの結婚生活を想像しちゃうたりしているのかなあ？ 家は一戸建てでえ、子供は女の子と男の子が1人ずつ欲しくってえ、家族みんなでお風呂に入るのおー！ ってか！？ いやあねえ、ナギちゃんったら……こんな朝早くからっ！☆」

「お、おい竜成やめろ！ このままじゃ、お前の命が危ない！」

ハイテンションで妄想を吐き出している竜成に向けて、俺は必死の警告をする。

「は？ 俺の命？」

そこまで言い終えて、ようやく渚紗に目を向けた。そして、次の瞬間には顔を蒼白にした。

「……へえ。……あんた、そんなに死にたいんだあ？」

渚紗の全身からあふれ出る、負のオーラ。両手にはすでに、固い拳が用意されており、それがバキバキと音を立てている。

それを見た竜成が、ようやく自らの命が断崖絶壁に立たされていることを悟る。

「お……、落ち着け、渚紗……！ オレが悪かったって！ “カップル登校”くらいでとどめときゃよかったんだよな！？ あは……

あはははは……!!」

必死に弁解の言葉を述べる竜成。だが、時すでに遅し……。

「“カップル登校” つつた時点で……、あんたの処刑は確定してんのよ!!」

「ひうぶい……!!?!?」

渚紗の稲妻のような拳を受けた竜成は、そんな不思議なうめき声を上げ、体を反時計回りにねじらせながら、先ほどまで談笑していたであろう友人グループのところまで吹っ飛んでいった。

「フン、真護！ 行くよ!!」

渚紗はそう言って踵を返し、新入生や在校生が恐れおののく視線を浴びつつ、入学式の行われる体育館へ大股で歩き始めた。

「お……お……」

俺は、奇妙なオブジェのようになった友人を遠目に見送りながら、そう返事をして渚紗のあとに続く。

じゃあな、竜成。お前のことは忘れない……!

月明かりの姫君 ？



入学式は滞りなく済み、俺と渚紗。そして、“なぜか”鼻に巨大な絆創膏が貼られた竜成とともに、クラス表の前にいた。朝会ったときの竜成は、あんなもの貼ってなかった。かわいそうに、きっと“何か”あったんだろう。そして、それはとてつもなく痛いことだったんだろう……。

「おっ、オレとマモ同じクラスじゃねえか」

そんなことを考えていると、竜成が嬉しそうに言いながらクラス表を指した。

「あ、マジで？」

俺は竜成の指したところに目を向ける。

確かに、1年3組の欄に俺と竜成の名前があった。

「騒がしい1年になりそうだな」

俺が笑いながらそう言うと、竜成は肩を組むようにして寄りかかってきて、がっしりとした重みが体にのしかかる。

「いいじゃねえかよ。知り合いが1人もいねえスタートを切るよりマシだろ？ ま、1年間よろしく頼むぜ」

そして、そんな挨拶をかわしてきたので、俺も「ああ、よろしく」と返した。

「あれ？ そういやあ、渚紗の名前がねえじゃねえか」

「あ、本当だ」

竜成に言われて再びクラス表に目を向けると、確かにうちのクラスに渚紗の名前はなかった。

「わたしは4組よ」

言われて俺は、渚紗の方を見る。

「クラス、別れちゃったわね」

渚紗は、少し寂しそうな微笑みを浮かべながら、俺たちにそう言った。

「かわいそうに……。引き裂かれた夫婦、悲恋の恋……。くう、泣けてくるぜ……！」

「あんた、またブン殴りたいの？」

涙を拭うような小芝居をする竜成に対し、渚紗はそう警告する。今度はかりは、竜成も素直に謝った。

「ま、別に学校そのものが変わっちゃうわけじゃないんだし。休み時間に会おうと思えばいつでも会えるでしょ？ 別に寂しくなんかないわ。それに、いつもあんたたちとくっついてるより、いっぱい友達ができそうで楽しみね」

そう言って、渚紗は微笑みを浮かべる。

同じクラスになれなかったのは残念だが、渚紗の言うとおり、新しい友達づくりのチャンスでもある。

俺は渚紗の言葉に頷く。

クラスも確認できたところで、俺は教室に向かおうと竜成に声をかけようとした時だった。

「……げっ、マジかよ」

突然、クラス表を眺めていた竜成の顔色が変わる。

何か不都合なことが起きた。そんな顔だ。

「どうした、竜成？」

「どうしたもこうしたも、アイツまで同じクラスかよ。まったく、冗談だろ」

言いながら、がっくり肩を落とす竜成。

俺は竜成が見ていたあたりに目を向けると、そこにはひと際目立つ名前が記載されていた。

「夜桜……舞姫……？」

目に飛び込んできたあまりにも美麗な字面に、俺は思わず口声に出して読んでしまった。

だが、正直それが誰なのかはわからず、

「誰？」

俺は率直な質問を投げかけてしまう。

「なあっ！！？ おまつ……、夜桜舞姫を知らねえのか！？」

俺の問いかけに、竜成が宇宙人でも見るかのような目をして叫んだ。

「夜桜舞姫。成績優秀。スポーツ万能。おまけに容姿端麗っつー、まあいわゆる、男の注目を集めねえわけがねえ女だ。実際中学時代には、他校の連中も含めて100人以上に告られたっつー伝説までありやがる。もちろん、1人残らず玉砕してるがな」

「？ それの何が嫌なんだ？」

俺は竜成に疑問を投げかける。

話を聞く限り、舞姫という少女は完璧といっても過言ではない存在であることが想像できる。竜成なら、同じクラスで1年間を過ごせるというだけで、喜びそうに思えたが……。

俺の問いに答えようと、竜成がうんざりした様子で口を開く。

「そりゃあ、オレだって最初に夜桜舞姫のことを聞いたときは狙い目にしようとか考えてたぜ。……けどなあ、本当のところを知っちゃった今じゃ、素直に喜べねえよ」

「本当のところ？」

竜成の口から出た言葉を繰り返す。

すると、竜成は何かに気付き、校門のほうを指しながら、

「ホラ、噂をすればなんとやらってな。アイツがその、夜桜舞姫だ」
言われて俺は、指された方に目を向けると、今頃になって校門を通り抜けてくる女子生徒が目に入った。入学式もとくに終わり、自分のクラスに向かう者さえいるなかを、悪びれる様子をまったく見せずにこちらへと歩んでくる。

切れ長の双眸をより一層細め、周囲の人間を近付けまいとした様子だ。

ただ、そんなことなどまったく気にならなくなってしまふほど、その少女は……、

――圧倒的な美しさを持っていた。

長身とは言えないものの、すらりとした身の丈に、背中の真中あたりまで伸ばした風に舞う艶やかな黒髪。

ただの制服が、まるでドレスにでも錯覚してしまうかのような引き締まった体つきに、まったく無駄のない歩行運動。

そして何より目を引くのが、人形のように整いつつも、たしかに人間味があふれ出している美貌。

そのすべてが、圧倒的に彼女の存在感を放っていた。

彼女は、ただ歩いてクラス表を見に来るだけなのだろう。それなのに、新入生・在校生はもちろん、その保真護者や教師までもが、彼女に目を奪われているのが容易く確認できた。

そして、それは俺も同じことだった。

気がつくと彼女は、俺のすぐそばにまで迫ってきているのに気付いた。身長差はあまりなく、俺と同じくらいなせいもあり、まっすぐ俺の目を見据えられている気さえしてしまう。何よりその美貌は、近くで見るとより一層の端麗さを放っていた。

俺は思わず、後ずさるようなかたちでその場を退き、やってきた夜桜舞姫という少女に場所を譲った。

一瞬だけこちらを一瞥してきたものの、すぐにクラス表に視線を移してしまう。

「1年3組、ね」

しばらく自分の名前を探した後、興味がなさそうにそう呟いた。その声は、美しい容姿には意外なほど、何か力強い意志のようなものがこもっているような気がした。

夜桜舞姫は、自分の目的だけ済ませると、さっさとクラス表に背を向けて校舎の方へと歩き出した。

俺を含め、何人もの学生が彼女の背中を見送ってしまっていた。

「感想は？」

「へっ？」

突然、竜成に話しかけられ、俺は間拔けな声をあげてしまった。

「だあから、夜桜舞姫だよ。どうだった？」

「いや、どうって言われても……。まだ口をきいたわけでもないし、何とも言えないよ。……ただ、ちよつと威圧感があったかなあ」

俺がそう答えると、ずつと眺めていた渚紗が入ってくる。

「威圧感とかいうより、あれ感じ悪くない？ 真護と目が合ってたみたいだけど、興味なさそうにしちゃってさ」

「いや、無理もないだろ。今日会ったばかりの、しかも男に興味を持てだなんて」

「そりゃ、そうだけど……」

渚紗は納得いかない様子で肯定した。

気のせいだろうか、渚紗は自分が馬鹿にされた時のような拗ねかたをしている気がするけど。

「その新生ちゃん！ ちょっといいかなあ！！」

と、校舎入口の方から突然声が聞こえた。

声のした方を見て目に映ったのは、髪の毛を赤やら金やら、派手に染め上げた男4人組みだった。

「おれたちさあ、とあるブカツの主催者なんだけどお、よかったら話聞いていかない？」

「5分……、いや、2分で終わらせるからさ！ ね？」

「ぜえ〜つたいにソンはさせないってえ〜。だからさあ〜、あそこにあるブシツにちよつち顔出してこうよ。ね？」

そんな下心丸出しの誘い文句を口々に並べながら、不快な笑みを浮かべる連中。言葉だけでは飽き足らず、馴れ馴れしく肩に手を置く者さえいた。

「アイツら……！！」

『部活動に誘ってただけだ』なんて言い訳されては終わりだけど、そんなことはどうでもいい。俺は何の考えもなしに、夜桜舞姫を慰めものにしようとしているであろう連中の元へ向かおうとしていた。

「お、おい。ちょっと待ってって真護！」

しかし、俺の腕を竜成が掴み、それを止めてしまう。

「何すんだ、放せよ竜成！ クラスメイトがヤバいんだぞ」

俺はまだまともに話したこともない、暫定クラスメイトを守ることで頭がいっぱいになり、竜成の腕をはがそうとする。だが、竜成もラグビーのスポーツ推薦でこの高校に入ったスポーツマン。そう簡単にひき剥がせはしない。

「いいから落ち着けて。お前が困ってる奴を放つとけないのは知ってるけど、夜桜舞姫なら大丈夫だっての」

俺の腕を掴みながら、竜成は落ち着き払った様子で俺にそう告げる。

「は？ それどういう意味だよ？」

竜成の言ってる言葉の意味がよく理解できず、そう聞き返す。

「まあ、見ててみるって。おもしろえもんが見られるぜ」

「おもしろいって……、そんなわけが……」

「――触んじゃねえよ。ぶっ飛ばすぞ」

俺が批判の言葉を発しようとした直後だった。

問題の起きている辺りから聞こえてきたのは、明らかに男のものとは違う……、ただ、男のものにしか聞こえない台詞だった。

俺は再び、先ほどの連中が夜桜舞姫に声をかけていた辺りに目を向ける。すると、さっきまで驚くほど気色悪い笑みを浮かべていた連中が、呆氣にとられた様子で立ち尽くしていた。

あの様子から察するに、間違いない。さっきの下品かつ物騒な台詞は、“夜桜舞姫”という美しい名前と容姿を兼ね備えた少女のものだった。

それに飽きることなく、夜桜舞姫は言葉を発し続ける。

「あのなあ、お前らがどこで、どの女を食おうが知ったこっちゃねえよ。けどなあ、私を巻き込むんじゃねえ。私はそんなに付き合

ってるほど暇じゃないし、軽くもない。わかったら、さっさとこの汚い手エどけろ。肩が腐るだろうが」

まるで準備でもしていたかの如き口調で、自らを取り囲んでいる男たちにそんな啖呵を切る。

竜成の言いたいことがなんとなくわかった気がする。

彼女はきつと……“あっち方面”の人なのだろう。

ただ、俺はすでに別の意味での不安に駆られていた。

夜桜舞姫は、確かに悠然とした態度でふるまっている。だが、当然相手もそれで黙っていられるわけもなく、見る見る額に青筋が立ってゆくのが見て取れたのだ。

ハッキリ言って、いつ爆発してもおかしくないような状態。まさに、一触即発である。

そして、その不安は即座に確信へと変わった。

「……この女アッ！　優しく声かけてやってりゃあ、いい気になりやがってッ！！」

男の一人が、夜桜舞姫に向かって拳を振り上げた。

ケンカ慣れしているであろうその拳は、容赦ない勢いで彼女に襲いかかる。俺はその様子を見ていられなくなり、思わず制止の叫びを発しようとした。

だが、その必要はまったくなかった。

「うおっ！！？」

声を上げたのは、殴りかかった男だった。それどころか、男はうつ伏せの体勢で宙に浮きあがっている。しかし、すぐに重力に耐え切れなくなり、腹からまっすぐ地面へと落ちていった。

「が……ッ！？」

突然起きたことを即座に理解できず、ただ腹部から伝わってくる圧痛に、小さな悲鳴を上げていた。

見ると彼女は、殴りかかってきた男の右サイドへと体を移動させており、そのまま殴りかかってきた勢いを使って足払いをしたようだった。

あまりにも華麗で、まったく無駄のない動き。ただ見ていただけの俺が追い切れなかったそれを、頭に血の上りきった連中に見極めることなどできるはずもなく、成す術もないままたたき落とされたのだった。

「こ……このアマ！ 調子に乗るんじゃねえぞ！！？」

仲間があっけなくやられたのを見て、残りの男3人が一斉に彼女に襲いかかる。

だが、それでも彼女の動きは乱れなかった。

手に持っていたスクールバッグを放り捨てたかと思うと、まず真正面から向かってきた男の頭に右手をかけ、跳び箱の要領で跳躍しつつ、真上からの重力を送り込むことで地面にたたきつける。

そのまま男たちの背後に着地したかと思うと、すぐに体を反回転させ、左側にいた男の背中に強烈な肘鉄を打ち込んだ。吹き飛ばされた男はそのまま地面に倒れこみ、腕を背中に回しながらもがき始める。

「な……、う、ウソだろ……？ 3人もいたのに……もう」

残された男一人が、あつというまにやられて地面に伏している仲間を目にし、一気に戦意喪失した様子を見せる。

だが、そんなことなどまったく気にせず、夜桜舞姫はたった一人となった男との距離を徐々に詰めていく。

「あ……や、やめろ！ わかった、俺たちが悪かったから！ 見逃してくれ！！」

だが、彼女は歩調を緩めることなく、許しを乞う男にじりじりと詰め寄っていく。

元より切れ長だった双眸が、今や目の前の相手を殺しかねないほどに、殺意を帯びたものになっている。そんな目で睨まれている男の気持ち、真護は容易に想像できた。

「も……もういいだろっ！！」

「？」

気がつく、俺は夜桜舞姫に向かって叫んでいた。

竜成がやめるよう促しているのも聞こえている。騒ぎを見物していた野次馬の視線も、一斉に俺の方へと向けられているが、俺は言葉を発することをやめなかった。

「ホ……ホラ。そいつ、謝ってるし。もう許してやったらどうだ？ アンタだって、もう二度と手は出さないだろ？」

俺は彼女に続き、懇願していた男にもそう尋ねる。

声にこそ出せていないものの、男は何度も頷いては、俺の言葉を認めた様子を彼女に見せる。

「……チッ」

すると、彼女も睨みを効かせていた双眸を緩める。そして、

「……同じこと繰り返すのと、学習すんの。どっち選びゃあいいかくらいわかるよなあ？」

そんな捨て台詞を吐いた後、再度俺の方を一瞥し、校舎内へと歩いていった。

「なんか……すごかったね」

黙ってみていた渚紗が、不意にそんな言葉を漏らした。

「真護、大丈夫なの？ 同じクラスでしょ？」

「あ、ああ。たぶん大丈夫だろ。止めたら止めたで、あれ以上のことはしなかったし。確かに乱暴なところはありそうだけど、話せばわかるやつ……だと、思う……？」

俺は自信なさげに答えた。

「しかし、マモよお。お前、いい加減にそのお人好しっぷりはどうかと思うぜ？」

俺の腕をがっしりと掴んでいた竜成が、ようやく手を解いてそんなことを言った。

「本当だよ。どう見たって、悪いのはあの男の人たちだもん。真護が止める必要なんかなかったじゃない」

渚紗も、竜成の意見に賛同してくる。

「ああ、ごめん。気をつけるよ」

俺は人差し指で頬を掻きながらそんなことを言ったものの、本気

でそうは思っていない。

確かに、自分でも驚くほどお人好しだとは思う。さっきだって、普通だったら放っておけば何のかかわりも持たずに済ませていい話だった。

けど、俺はどうしてもそうはできない。

少しでも助けるべきなら、それが問題の種をまいた張本人だったとしても、なんとかして守ろうと突っ走ってしまう。

治したいとは思っていても、なぜかどうにもならない。

ただ、今回は自分でもおかしいことだと思う。

夜桜舞姫をどうかしようと思っていたあの男たちに対して、俺は『助けたい』なんていう感情は、間違いなく持っていなかった。

なのに俺は気がつく、彼女を止めるために叫んでいた。

自らの謎めいた感情に悶々としながらも、俺たちは教室に向かうことにした。

月明かりの姫君？

登校初日の妙な気まずさが漂う教室で、高校生活最初のホームルームが行われていた。

担当教員の挨拶。時間割表の配布。事務的事項の伝達などを一通り終えたところで、顔合わせも兼ねた自己紹介が始まる。

第一印象を考えてか、皆一様に言葉を選んでおり、たどたどしい口調である。

そんななか、ただ一人、竜成だけは堂々とした自己紹介をし、初顔合わせのクラスメイトを一気に自分のペースへと引き込んだ。

それによって、クラスの空気は一気に緩み、隣の席の者に話かける者さえ現れる。

何度かこういう光景は見ているが、やはり竜成は天性のムードメーカーなのだ、改めて確信する。このクラスから、出会ったばかりの気まずさが消えてなくなるのも、そう遠い日ではないのだろう。全員の自己紹介が済んだところで、今日の予定は終了。クラスメイトに声をかける者もいれば、そそくさと下校する者もいる。

ふと、俺はある席に目を向けた。

窓際、最後列。ホームルームの最中、一瞬たりとも埋まることなく、空席のままだった場所。

夜桜舞姫の席だ。

あの後、彼女の姿は一度も見えていない。

絡んできた連中を倒して校舎内に姿を消したきり、どこへ行ったのかもわからない。机に誰かが触ったり、椅子に座ったりした様子もない。おそらく、顔を出してすらいらないのだろう。

「……」

なぜだか、俺は朝の出来事から、妙に夜桜舞姫というあのクラスメイトのことが気にかかっていた。もちろん、あれほどの騒ぎだったのだから、彼女の存在が印象深く残っている者は多いだろう。

しかし、俺の感じているのは、その程度感覚ではなかった。
わざわざケンカの仲裁に入ったり。今だって、一度もクラスに顔を出していないことを気にしたり。

まだ会話もしたことがないどころか、相手は自分の名前すら知らない。だというのに、俺は自分でもどうかしてると思うくらいに、彼女のことが気にかかっている。

とてつもなく妙な感覚。言うなれば……“そうしなければならぬ義務感”のようなものすら感じているような気がしていた。

「夜桜舞姫、か……」

「白昼堂々、浮気か？」

「！」

誤解を招きかねないような呼びかけに、俺は思わず飛びのいてから振り返る。

声の主は当然、竜成だ。

「き、急に話しかけるなよな！　びっくりしただろ。……っつか、浮気ってなんだよ浮気って」

「いや？　ただ、マモの口からナギ以外の女の名前が聞こえたから、ちょっと心配になっちゃってよ」

言いながら、竜成は意味深な笑みを浮かべている。

少なくとも、友人を心配するときの表情ではないことは確かだ。

「お前なあ……。何度も言ってるけど、俺と渚紗はそういうのじゃないんだって。ただの幼馴染。それに、渚紗にはずっと片思いしてる男がいるらしいぞ」

俺はそう言って、竜成の勘違いを正そうとする。

そう。渚紗には、小学生以来の想い人がいるのだそう。だが本人曰く、その男はかなり鈍感らしく、渚紗の想いには全くと言っていいほど気が付いていないという。

幼馴染の俺が言うのもなんだが、渚紗はかなり可愛い方だと思う。中学の時も、数名の男子から告白されていたし、モテる方でもあ

るのだろう。

もしその男が、本当に渚紗の気持ちに気が付いていないのだとしたら、ハッキリ言って、その男は本当に……、

「本当に、もったいねーことしてるよなあ、そのヤローはよ」

「え？」

言葉遣いには差があるものの、俺が考えていたのと同じことを竜成が口にしたせいで、素っ頓狂な声をあげてしまった。

「いや、別に。ただ、そのヤローも、この調子じゃあジジイになっても気付かぬーかもな……」

「何だよ竜成、『この調子』って。まるで渚紗の好きな男を知ってるみたいな言い方だな」

「……ハア。ダメだこりゃあ……」

「え？ 何がダメなんだ？」

俺が疑問を抱いているのをよそに、竜成は「なんでもねーよ」と言って、ひらひらと手を振った。

呆れたような顔に見えるのは気のせいだろうか。

「まあ、それはそれとしてだ。マモ、悪いことは言わねえ。夜桜舞姫はやめといた方がいいと思うぜ」

渚紗の話が終わったかと思うと、今度は夜桜舞姫の名前が出てきた。

「あのな、確かにあの子の名前をつぶやきはしたけど、そういう意味じゃないんだって。……ただ、なんか気にかかっちゃってさ」

また妙な勘違いをされていては困ると思い、俺は即座に言葉を返した。だが、なぜか渚紗の話をしていたときのように、スムーズな言葉が出てこない自分がいることに気付く。

気にかかっていたのは事実だが、竜成の考えているような感情が芽生えていないのもまた事実のはずだというのに。

「ふーん。ま、どちらにしろ、あんま関わらねー方がいいと思うぜ。アイツには、色々と妙な噂もあるしな」

「妙な噂？」

「なんでも、真夜中に住宅街だの公園だの、そこらじゅうをうろついているのを見たとか。オレの知り合いには、夜遊びが好きな連中も多いんでね。そういう連中から聞いた噂だよ」

俺は、竜成の淡々とした説明を聞いていた。

夜桜舞姫は、俺と同じ高校1年生。当然、夜遊びが認められるような年齢ではない。もし竜成が言っている、“噂”というのが本当だとしたら、確かに妙な話ではある。

「一部じゃあ、今起きてる“連続噛み付き魔事件”に関わりがあるんじゃないかとすら言われてるそうだけ。さすがにそれは言いすぎだとも思うんだが、本人がああ様子じゃあ、疑われたって仕方ねーとも思うがな」

“連続噛み付き魔事件”。まさかクラスメイトの話題でその話が出てくるとは思ってもみなかった。

だが、夜桜舞姫という少女の身のこなしには、確かに見惚れてしまっただのしなやかさがあつた。

一方、事件の犯人も、現場には何一つとして証拠を残さない完璧主義的な人物像が浮かび上がっている。

謎が多い少女に、謎だらけの事件。クラスメイトを疑うようなことはしたくないが、関連付けるなという方が無理な話なのかもしれない。

「おーい、真護ー！」

空席のままさびしげに佇んでいる、夜桜舞姫の席を眺めながらそんなことを考えていると、廊下から聞きなれた声が飛んできた。

渚紗である。

「おや？ お迎えが来たみたいだぜ、旦那さん」

さっきまで物騒な噂話を口にしていた竜成が、俺の背中を叩き、行くように促してくる。

「だから、そういうのじゃないって」

「照れるんじゃないよ！」

俺の抗議も虚しく、竜成は腹立たしい微笑みで俺の背中を押した。

だが、俺も言われっぱなしで終わりたいはないと思い、

「……竜成」

「ん？」

「祝福してくれてサンキューな。さっきのお言葉は、しっかりと渚紗に伝えとくぜ」

「!!!？」

青ざめる竜成を背に、俺は廊下で待つ渚紗の元へと向かった。

もちろん、本当に告げ口したりはしない。だが明日になって、竜成が何も知らない渚紗に向かってジャンピング土下座をするのを想像するのは、ちょっと面白かったりもした。

月明かりの姫君 ？



夕食を食べ終え、俺はリビングのソファでくつろいでいた。

読んでいたコミック誌から目を離し、時計に目をやると、時刻は11時半を回っていた。

真夜中だということを体が自覚してしまったせいか、先ほどまで全く感じていなかった眠気が急激に襲ってくる。

「……そろそろ寝るか」

俺は大きなあくびをしながら、リビングの電気を消し、自室へと向かう。

ベッドと勉強机。俺の背丈より少し低い本棚という殺風景な部屋に入り、ベッドに潜り込もうと照明のスイッチに手をかけた途端、俺は大事なことに気がついた。

「やばっ、参考書……！！」

俺の学校は、授業に対する意欲や態度よりも、定期試験の成績が重要視されている。どれだけたくさんの発言をしようが宿題をそつなくこなそうが、定期試験で赤点を取れば、長期休暇中にやらなければならぬ大量の課題が容赦なく課せられる仕組みになっていると、今日のホームルームで聞かされた。その対策のために、学校指定の参考書が必要不可欠なのだそうだ。

学校帰りに必ず購入しようと思っていたが、渚紗の買い物に付き合っていたこともあり、うっかり忘れてしまっていたことに気づいたのである。

俺は、「学校指定の参考書だが、学生の自主性を試すために、参考書だけは各自別購入とする」とか言っていた教員のことを若干恨みつつ、携帯電話の時計を見ると、現在の時刻は23時50分。

「間に合うか？」

そう呟くと、俺は部屋の明かりを消し、玄関へと向かう。

俺の家から歩いて15分ほどのところに、大きくはないもののそれなりに品ぞろえが整っている書店がある。

そこは、いつも夜の0時頃まで開いていてくれるため、急に読みたくなった本を買えると、この辺りでは重宝されているのだ。

俺はその店に向かおうと、靴を引っ掛けて夜道を走り始めた。

日付が変わる直前の住宅街は、異様な静けさに満ちていた。静寂に包まれた闇夜に、俺の足音だけが響く。それが自分を追いかけているような錯覚を覚えたが、かまわず駆け続ける。

こんな様子を渚紗にでも見られたら、「明日の分だけは図書館で借りてやればいいのに」と言われるだろう。だが、俺はやるべきことはできるだけ早く済ませたい性分なのだ。

10分ほど夜道を走り、息も絶え絶えになりながら、ギリギリで書店に滑り込む。

閉店作業を始めている店員の急かすような視線を浴びながら、俺は教本のコーナーへと進んだ。

が、いくら探しても、そこには学校指定の参考書は売られてはいなかった。

真夜中の住宅街を駆け抜けてきた努力が水の泡と化した瞬間だった。

「……勘弁してくれよ」

そんな言葉が口を突き、思わず膝に手をついてうなだれる。

ふと店の入り口に目を向けると、店長であろうお年を召した男性が、腕組みをしてドアに寄りかかりながらこちらを見つめている。どうやら、早くしろということらしい。

諦めきれない気持ちはあったが、店に迷惑をかけるわけにはいかない。

俺は走りつかれた足を無理やり動かし、書店を出た……と同時に、拒絶するかのように店のシャッターが下ろされた。

「ついてないなあ」

そんな愚痴をこぼし、仕方なく帰ろうと来た道を歩き始めた時だった。

「？」

店を出て、すぐ傍にある外灯。その足元で、何かがうごめいているのに気がついた。

少し不気味に思いつつも、それに近づいてみる。

すると、それはOL風の女性だった。

街頭に手を着く体勢で、照らされた地面にうずくまっている。息が乱れているのか、肩を上下させ、とてつもなく苦しんでいるようにも見えた。

病気だろうか？ 俺はそんな状態の女性を放っておくことができず、つい声をかけてしまう。

「あ、あの？」

「……！！？」

突然声をかけてしまったせいか、女性は小さな悲鳴を上げる。怯えた様子で顔を上げ、こちらを見ている。

「あ、すいません。その、苦しんでるように見えたので。大丈夫、ですか？」

「あ……、いえ。大丈夫です。……すみません」

そう答えると、女性は外灯につかまりながらゆっくりと立ち始める。

だが、手足は震えているし、顔色も悪い。額には脂汗のようなものまで浮かべている。申し訳ないが、とても大丈夫そうには見えない。

「あ、気をつけて下さい。手伝いますよ」

俺は手を貸そうと、支えるように女性の肩に触れた。

「ひ……ッ……！！」

その途端、またしても女性は小さな悲鳴を上あげ、俺の手を振りほどいた。俺もわずかながら、反射的に後ろに飛び退いてしまう。

「ご、ごめんなさい……。でも、本当に……大丈夫、です……。から」

消え入りそうな声でそう告げると、女性は民家の塀を伝いながら歩きはじめる。だが、それも長くは続かず、すぐに前のめりに倒れ込んでしまう。

「ちよっ……!」

見ていられなくなり、俺はとっさに駆け寄り、倒れかけている女性の体を支えた。抱きかかえるような体勢で受け止めたおかげで、なんとか地面に激突するのは防ぐ。

「ッ!? やめてッ!!」

「……!?!」

だが、女性は俺のことを突き飛ばし、支えがなくなった体は膝からその場に倒れてしまう。

わけがわからず、ただ茫然と立ち尽くし、苦しそうに倒れている女性を見つめる俺。

そして、すぐに異変に気付く。

女性は上半身を起こし、自分の体を抱きしめながら震えだしたのだ。先ほど見た手足の震えどころの騒ぎではない。今は全身が震えており、見ているだけでもわずかな恐怖を感じる。

異変はそれだけでは止まらない。

「う……ああ……。いや、ダメ……!」

唐突に頬を紅潮させ、あえぎ声のようなもので発したのだ。

「ん……っ、はああ、あ……!!」

苦しさに体をよじらせるせいで、妙な衣擦れの音までする。

不謹慎だとは思いつつも、こちらまで変な気分になりそうだった。

「あ、あの……。俺、救急車呼びますんで、その……ちよっと待って下さいね」

これ以上女見てはいけなそうと思い、俺は女性から目をそらし、ズボンのポケットから携帯電話を取り出した。

119番をプッシュし、耳に当てる。コール音が鳴り始めてすぐ、オペレーターと思しき男性が電話に出た。

「あ、すみません。急病の方がいまして。場所は……」

現在地を告げようとした、その刹那のことだった。

ついさっきまで苦しそうに地面に伏していた女性が、いつの間にか起き上がり、携帯電話を持っている方の俺の腕をつかんでいた。

「……」

だが、女性は何も言わない。ただひたすら、俺の腕をつかんでいる。

ややうつむいているせいで、表情はよく見えない。

「……え、えっと」

電話口からオペレーターの声が聞こえていたが、思わず女性の方に話しかけてしまっていた。

「今、救急車呼んでますんで。すぐに助けがくると思い……」

「……ちようだい」

女性のくぐもった声が、俺の言葉をさえぎる。

「え？」

その声に反応した直後、女性はゆっくりと顔を上げ始めた。

目が合った瞬間、俺は差し出されたあまりの異常事態に戦慄する。

——血を落としたような、真っ赤な瞳。

そして、先と変わらぬ紅潮した頬と、口元に不気味な笑みを携えて、俺を見つめていたのだ。

「……ッ!!」

冷たいで背筋を撫でられるような感覚に、思わず女性の手を振りほどき後退する。

だが、女性はおぼつかない足取りで、ユラユラと体を揺らしながらも距離を詰めようとする。

「ちようだい……。ちようだい……。もう、我慢できないの」

くぐもった声で、わけのわからないことまで呟き続けている。

思わず後ずさる俺の目に、さらなる異変が飛び込んで来た。

女性の口元。ちょうど上奥歯のあたりから剥き出している犬歯。

……いや、犬歯という表現ではあまりにも可愛らしすぎるか。
それは、こう表現するのが相応しい。

「牙……だって……？」

不気味な微笑みを従える女性の口元からは、そうとしか例えようのない、鋭く長い歯があった。

突き刺されば堪え難い痛みが痛覚を刺激することは、容易に想像できる。それほど残酷で凶暴なものが、なぜこんな人間の女性から生えているのか。

「ちようだい……、お願いだから……」

俺の無駄な思考を、上ずった声が停止させる。気づくと、女性は俺の目の前まで迫っており、今にも体に触れようとしていた。

とっさに距離を開けようとする。だが、いつの間にか俺は、民家の塀まで追いつめられていた。

逃げ場を失った俺。その循環、女性――、いや、化物の妙に冷たい手が、勢いを増して首を押さえつけるのを拒否することができなかった。

「が……っ、は……！！」

首を絞められている息苦しさ、押さえつけられた勢いで強打した背中、痛みに、うめき声を上げる。

恐怖で心拍数を急上昇させながらも、俺にはまだ、死の恐怖から逃れようとする余力が残っていた。

必死に化物の手を引き剥がそうとする。だが、首を絞めつける腕はビクともしなかった。

首を絞められているせいで、確かに体の力はいまぐ入らない。

だが、相手はかなりの細腕。本来なら男が力負けするはずがないのに、その常識が通用しないほどの腕力だ。

「ちようだい……。ちようだい……」

その間も、化物は鋭い牙を剥き出しにしたまま、同じ言葉を繰り返している。

「……や、め」

ふさがれた気管にできたわずかな隙間から、絞り出すように声を発する。

だが、そんなことはお構いなしに、化物の牙は少しずつ。だが、確実に俺の首筋へと近づいていた。

「血……。血を……」

鼓膜を震わせる、化物の囁き。

容赦なく、化物の口が大きく開かれる。

生温かい吐息が首筋を撫でまわし、鳥肌が立つ。

死と隣り合わせの恐怖と、身を任せてしまいたくなる官能さ。その2つが同居しているような、異常な感覚が、俺の全身をつつみこんでいるのが想像できる。

それでも、俺にはまだ前者の感覚が強く残っていた。

迫りくる牙から逃れようと、必死に首を反らせる。だが、そんなことで逃げられるわけがない。化物の牙は、今にも俺の首筋に突き立てられようとしていた。

“ 殺される ”

その言葉が頭をよぎり、固く目を閉じる。

死ぬのか？ 俺は、ここで？

嫌だ……。

ちがう、ダメだ……！

死にたくなんかない。死んじゃダメなんだ。

俺は、約束したんだ。もう絶対に、傍を離れないって。

何があっても、これから絶対に俺が守り抜くって。

あの日……。アイツが死にかけたあの日。俺はそう誓ったんだ。だから、俺は死にたくない。死ぬわけにはいかない。

……なのに、俺は“ また ”、こんなにも非力だ……！！

「なんだ。威勢がいいのは口だけかよ」

不意に、そんな声が聞こえてくる。

俺の思考に問うような、力強くも冷え切った女の声。

俺は閉ざしていた目を開き、声のした方へ視線を向けようとした。

その刹那――、

「がっ……!?!」

うめき声と同時に、化物の手が俺の首から外れる。

だが、それは当然、化物が自らの慈悲で獲物を逃したわけではない。

声の主。突然の襲撃者。

俺も、そしておそらく化物も想定していなかったイレギュラーに、その細い体は吹き飛ばされたのだ。

同時に、俺の気管も圧迫感から解放され、止められていた酸素の供給が始まる。一斉に肺へと流れ込んでゆく新鮮な空気の感覚に、思わず崩れ落ち、むせ返ってしまう。

「お前さあ、そんなんでよく私を止めようと思ったな。逆に尊敬するね」

咳きこむ俺の頭上から、そんな言葉が降り注がれる。

止める？ 何の事だか俺にはさっぱりわからない。

俺は、まだ気道の確保をし切れていない首を押さえながら、頭上を見上げる。

そこには、見覚えのあるシルエットが立ち尽くしていた。

艶やかな黒髪。人形のように整った顔立ちと、切れ長の双眸。

高校の制服をドレスにでも見違える、洗練された体躯。

見誤りようなない、その姿は紛れもない、

「……舞姫まいひめ」

俺の口からは、思わず下の名前が零れていた。

だって、仕方がないだろ？ その姿は、そうとしか言いようがな

かったのだから。

夜風になびく黒髪を、雲の切れ間から覗く月明かりで煌めかせ、
しなやかに立ち尽くす。

“夜桜舞姫”という名に恥じない在り様だったのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5540x/>

メモリアリストの護神

2011年11月3日12時18分発行